

らい 来ぶらり 43

目白その故事来歴



「目白」という地名からあなたはまず何を連想されますか？“学生の街”“閑静な住宅街”あるいは“某政治家のお屋敷のあるところ”といういろいろ浮かぶと思います。

さて、この現行の豊島区目白という住居表示は昭和41年に目白町・椎名町・高田本町・池袋の全部もしくはその一部分を合わせてできたもので、地理的には豊島区の南西部に位置し、東西に細長いのが特長です。神田川沿いにあるこの目白の街も昔は木々がうっそうとし、たぬきやきつねが出没するような未開の地だったようです。ところが意外と知られていないのが目白の地名の由来です。

これにはいくつかの説があって、たとえば白い名馬を産したからとか、寛永年間のころ、将軍家光が鷹狩りの際に「目黒に対して目白と呼ぶべし」といったからだとかいわれてい

ますが、やはり忘れてはならないのは目白不動の存在です。

江戸開府の際に徳川氏は慈眼大師の進言によって、江戸の鎮護のため目の色がそれぞれ白・黒・赤・青の4つの不動像を四方に建立し、後に黄色をくわえ江戸五色不動（または五眼不動）といわれています。特に家光が本尊に目白の号を贈り、以後目白不動明王（伝弘法大師作）と称することになり、またそのあたり一帯を目白台と呼ぶようになりました。

当時は多くの人々が参拝に訪れ、それこそめじろ押しのにぎわいだったといえます。

しかしこのお寺も昭和20年5月の戦災で建物は焼失してしまい、現在では豊島区高田2丁目にある神霊山金乗院に不動、俱梨伽羅など一部がまつられているだけとなりました。その金乗院の中には1831年に仙台で「青柳館文庫」を創設し、公共図書館の祖といわれている青柳文蔵氏の墓もあります。

ちなみに豊島区の「豊島」という地名はすでに『続日本紀』（797年）の中にあり、現在の町名としての豊島が北区にあることからかなり広い範囲を指していたことがわかります。また“豊島の入り江”ということばがあり、大昔このあたりが海だったことが容易に想像できるのです。

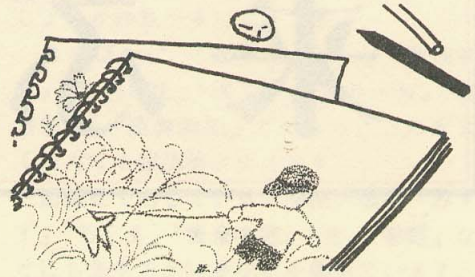
（雑誌係 北村 誠）

おも
秋に想う

風が涼しくなった。虫の声もする。ビールはもう飲みあきたし、暑くて眠れない夜も少なくなった。読書の秋、なんて言うてしまうとちょっと陳腐だ。でも、こんな季節になると昔読んで気に入っていた本なんかを、本棚の奥から引っ張り出してしまったりする。

図書館にでも行こうかと、おもてに出る。秋になると毎年、すすきが背の高さくらいまで茂って、金色にゆれていた空き地が、いつの間にか整地され、高い金網で囲われたグラウンドになっていた。僕が中学生くらいのころまでは、この新興住宅地もまだ開発途上で、区画整理にあぶれた土地があちこちで雑草を茂らせていた。僕はあまり外で遊ぶのが好きでない子供だったが、それでも、すすきの穂やたんぼぼの綿毛にまみれて走り回った記憶は何度となくある。

パチンコ屋や、車のショールーム。貸ビデオや酒の量販店。そんなものがいつの間にか身近に立ち並ぶようになった。僕らも当然の



ようにそれらを利用して、「便利だね」なんて言って笑っている。開発が悪いことだなんて思わないし、思う資格もない。

金網のむこうでは、小学4年生くらいの子供たちが、きゃーきゃー言いながらサッカーに興じている。

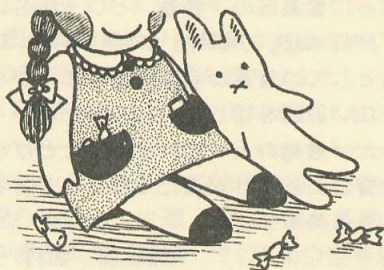
図書館にでも行こうと思う。昔読んで気に入っていた本や、照れ臭くて手に取れないでいた本。そんなものが無性に読みたくなる。

秋というのは、そんな季節だ。

(国文学科4年 谷 晃一)

澄み渡った空を見上げていると、いつしか途方もない空夢へと迷い込んでいく……。

宇宙とはどんなものか。少女が戯れにシャボン玉をいくつも飛ばす。そのひとつひとつが宇宙である。それらはすぐにパチンとはじけ、途端に宇宙は消える。それらのどこかに私たちは生きるのだが、あまりにちっぽけな存在である。少女は成長し、やがて母体となり、子を産む(あなたまたは私の誕生である)。人は生まれ出る時、頭の中一杯に広がった宇宙を彷徨い、やっとの思いで地球を探しあて、



降り立って空を見上げる。その時見た空の情景がその人の心の在り方となる。それは透き通る青空かも知れない。薔薇色の夕焼けかも知れない。だが、記憶に残るのは“情景”ではなく“感動”なのだ。だから、私たちは理由も分からずに空に心惹かれることがある。また、宇宙を彷徨った経験から、宇宙へ想いを馳せる。しかし、見上げているのは、気の遠くなるようなシャボン玉宇宙に過ぎない。私たちにとって現実的な空は心の中にある。心の空はありとあらゆる感動を養分にして、いくらでも広がっていく。例えば、自分の体験した出来事に感動したり、本を読んで、時間・空間を越えて見知らぬ人から感動を受けたりして拡大していくのである。心の空の拡大はすなわち人間としての成長を意味する。

いろんなことをしてみよう。いろんな本を読んでみよう。どうです、私の空夢に付き合いついでに、例えば図書館の本を1冊……。

(洋書係 篠原三佳)

毎日発行される新聞には、政治・経済からスポーツに至るまで膨大な量の情報が収められており、様々な場面で人々に利用されている。

多年に渡る新聞情報の中から特定の記事を探すことは大変な作業である。記事を切り抜きファイルしても、いつのまにか收拾がつかなくなり、調べたい時に見つからないという事態になる。また新聞は形が大きく、紙の質が悪いため劣化も激しく、長期の保存には適さない。

そのような新聞の持つ物理的欠点を克服して、比較的手軽に利用できるようにしたものが「縮刷版」である。保存に耐える紙を用いて、元の約4分の1の大きさで1か月毎に出版される。しかし全国紙の場合、形を縮小し1か月単位にまとめても相当大部な書物となる。1冊の厚さが5センチ以上となり、手軽に扱える重さではない。1年分と

もなれば両手でも間に合わない。書棚もたちまち占領される。また文字は小さく、コピーをしても潰れて読めない。このような新聞情報をマイクロフィルム化する方法もあるが、検索したい記事の掲載時期が不明な場合……途方に暮れる結果となる。

そこで登場したのが「CD-HIASK」である。これは近年注目されているCD-ROMを媒体とした電子出版である。1枚のCD-ROMには2億7千万文字分の情報が入り、多角的な検索を瞬時に行える。「広辞苑」だと30冊分が1枚に収まる計算だ。「CD-HIASK」では、朝日新聞1年分の全文記

CD-HIASK
(朝日新聞全文記事データベース)



事が1枚のCD-ROMに記憶されている。検索項目も豊富で、様々な言葉から引ける「キーワード検索」、特定分野の全ての記事が検索できる「主題分類」や「国別」「記事種別」「掲載日付・頁」等12項目からアクセス可能なスグレモノだ。法経図書センターで利用できる。(洋書係 入村和彦)

カウンターの内側で — 蔵書点検 —

図書館では資料を収集し、分類・排架して、利用者の必要に応じいつでも提供できるように、保存上の注意や書架の整頓、また所在確認をする蔵書点検などを行っている。

今回、この蔵書点検について記してみる。

この作業は、書架目録と資料を1冊1冊照合し確認するもので、毎年2月中旬に開架資料、9月上旬に書庫資料の点検をしている。

昨年度の所在不明図書は、開架図書室136、参考室58、書庫74で合計268冊であった。

この点検作業は、不明図書をリストアップするだけでなく、破損本の修理、ラベル訂正、目録の修正などのきっかけとなる。

事前の準備や事後処理に手間がかかるが、自館の資料を改めて知る機会にもなる。

作業をしながら珍しい資料に出会うことがある。特に利用者から請求されることの少ない旧分類(昭和23年までの所蔵資料)は興味を引くものが多く、旧学習院編纂・刊行の明治期の教科書や『栄雅読方国歌道志るべ』(元禄2年)、『名所方角鈔』(寛文6年)など貴重なものがある。『甲冑古図』(文化4年)は180年以上も前のものとは思えないほど鮮明な色のままで見とれてしまう。

かつて、これらの資料をどんな人が手にしたのだろうか、と想像すると楽しい。

蔵書点検は職員だけでなく、学生アルバイトの手を借りることもある。機会があったら参加してみませんか。

(運用係 上野しのぶ)

参考室あれこれ

「話題から」のコーナーは、このところ掲示するものが、次々にあって張りきれない盛況です。このコーナーは新聞や雑誌で取り上げられた、学習院の教員や職員の論文や話題として載った記事などを掲示しているところです。

特に今回の新内閣発足の前後には、新聞の「主張・解説」や「論壇時評」などに、見識者の声あるいは展望といったことで本学の教授が何回も登場しています。また、総合誌といわれる雑誌の「世界」「文芸春秋」「諸君」などがぞえきれないほどです。

『ジュリスト』『法学セミナー』『法学教室』などには判例や条文の解説を必ずどな

たかが書いています。中でも芦部信喜先生はご専門が「憲法」ということもあってでしょうが件数が多いようです。

このほかに、『数学セミナー』『数理学』、『月刊言語』『国文学』『ユリイカ』『図書新聞』『読書新聞』といったところがよく出てくる雑誌等といえます。

出版社で出しているPR誌の類の『みすず』『ちくま』『書齋の窓』『波』『学燈』などにも先生方が随筆などを書いてあります。専門分野のこと、趣味の話などのびのびと執筆されています。中でも、講談社で出している『本』に今年一月から連載されている小西正泰先生の「あんな虫・こんな虫」のシリーズは、毎回たいへん面白く、読者を引きつけています。(参考係 甲斐静子)

モスクワの行列

本に囲まれた仕事を始めて、毎日あふれんばかりの本を目にします。そんな鮮やかな群れ？を見る度に、私の頭をひとつの思い出が駆け巡ります。3年前、語学の勉強でモスクワに住んでいた時のこと。野菜や肉を売る市場に1台の大きなトラックがやって来ました。買い物をしていた人たちは我先にとトラックへ詰め掛け、あっという間に行列が出来ました。何かと頑張ってのぞき込むと、それはちょうどペレストロイカで解禁になった本の販売だったのです。むさぼるように新しい知識を吸収しようとする姿を今も忘れられません。色彩的にも思想的にも多様に出版され続ける本。人生80年と考へてもすべての本を読むことなんて不可能です。

しかし私は、いつか見た人々と自分を重ねて、常に本の持つ情報には貪欲に敏感になっていきたいのです。

(アルバイト 志賀伸子)



お知らせ

○大学祭期間中は閉館します。

10月30日(土)から11月4日(木)までの大学祭期間中は、ロビーと第1閲覧室が展示会場となりますので閉館します。

ご利用できませんのでご了承ください。

○図書館のまわりが整備されました。

天候不順だった夏も終わりました。

7月下旬から9月中旬にかけておこなわれ

ていた工事で、利用者にご不便をかけていましたが、正門からの通路や図書館の周囲がレンガ舗装されました。

また、かなりの樹木が切られたり移植されたりしました。今年は降るような落葉が見られないと思うとちょっと寂しい気もします。

読書の秋です。玄関前が明るくなった図書館をご利用ください。

来ぶらり No.43 1993年10月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：田村節子 小林邦子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221